

# 「教職実践演習」の成果と課題

## —初年度の取り組みを通して学生は何を学んだか—

益 田 亮 英

Results and Their Implications from the Class

“Practical Seminar in Teaching Methodology”:

What the Teacher Trainees Learned from their Practicum in the First Year of College

Ryoei Masuda

### 1. はじめに

2013年度後期から、教職科目「教職実践演習」（2単位）が新設科目としてスタートした。本学における4年生の小・中・高校の教員免許取得希望者は21名で、免許種別と人数は表1のとおりである。

教職実践演習は、教職課程の学修の中で、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて確認するものであり、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている。さらに、学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、その定着を図ることにより、教員生活をより円滑にスタートできることを狙いとしている。内容として以下の4つの項目を含めることが適当であるとされている<sup>1</sup>。

「教職実践演習」に求められる指導内容

- ① 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項
- ③ 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- ④ 教科・保育内容等の指導力に関する事項

表1 教員免許希望者21人の免許の組み合わせと希望者数

免許の組み合わせ	中・高英語のみ	中・高英語 +小学校	小学校のみ	小学校 +特別支援	高校公民 +特別支援
人数	2人	4人	2人	11人	2人

終了時のアンケート及び追跡調査によるアンケートをもとに、初年度の授業づくりについて、成果と課題について一担当者の立場から振り返りたい。

## 2. 教職実践演習の展開

### (1) 指導計画と到達目標

教職実践演習の実施に際しては、外部講師や実地視察の日程の調整などから当初のシラバスを多少変更し、以下の計画によって展開することにした。

#### [指導計画]

回	テ ー マ	内 容	形 態	指導内容との関連
1	オリエンテーション	科目の目的と展開について	全体	①②③④
2	教職の基礎 1	履修カルテの整理とグループ討議 「私が目指す教師像」	グループ・全体	①②③
3	教職の基礎 2	講話「求められている教師像」	全体	①②③
4	教職の基礎 3	グループ討議・発表	グループ・全体	①②③
5	保護者・教師との信頼関係づくり 1	講話「学校の危機管理」 学校の危機管理と危機管理能力	全体	①②③
6	保護者・教師との信頼関係づくり 2	具体事例の研究 「具体例をもとにグループ討議」	グループ	①②③
7	保護者・教師との信頼関係づくり 3	発表	全体	②
8・9	学級経営と生徒理解 1	実地視察と講話 「近隣の関係学校の視察」	グループ	②③④
10	学級経営と生徒理解 2	学級経営についてのロールプレイング	グループ・全体	②③④
11	学級経営と生徒理解 3	グループ討議・発表	グループ・全体	②③④
12	教科指導と生徒指導 1	グループ討議「教育実習で発見した課題」	グループ・全体	②③④
13	教科指導と生徒指導 2	グループ討議「生徒指導って何？」	グループ・全体	③④
14	教科指導と生徒指導 3	生徒指導力について考える	個人	③④
15	まとめ	プレゼンテーション	全体	①②③④

#### [到達目標]

- ① 教育に対する使命感や情熱、高い倫理観や規範意識を持ち子どもと一緒に成長しようとする姿勢を身につける。
- ② 組織人としての自覚を持ち、他の教師や保護者、地域の関係者と良好な人間関係を保つことができる。

- ③ こどもに公平かつ受容的な態度で接し信頼関係を築きながら規律ある学級経営ができる。
- ④ 教科等の知識や技能など学習指導に必要な基本的事項を身に付け授業計画や学習形態を工夫することができる。

## (2) 取り組みの特徴

### ① 担当教員とグループ分け

授業は、子ども専攻教員7名で担当し、21名の学生を小学校・中高英語、高校公民の免許別のグループに分けた。小学校については更に小グループとし発言する機会の確保に努めた。各グループの人員は3～4名で各グループに担当教員を配置し、適宜指導助言を行った。授業形態はテーマの内容によって、全員が一緒になったり、免許種別、あるいは7～8名のグループなど柔軟に組織した。

### ② 外部機関との連携協力

熊本市の教育委員会及び熊本市小学校校長会には小学校教育実習や観察実習の実施に関してさまざまなアドバイスをいただいている。熊本市教育委員会から教育審議員に熊本市が求める教師像を中心に教師に求められる資質について講話をお願いした。また、菊陽町教育委員会とは、小学校外国語活動に関して連携協力する協定を結んでいることもあって、多くの学生が、町立小学校で外国語活動のボランティアをしている。今回は菊陽西小学校に授業参観と菊陽西小学校の取り組みについての講話をお願いした。学院内のルーテル中学・高等学校には高大連携の一環として、中・高の授業参観の後、高校主事に学級経営に関する講話をお願いした。大津町立大津小学校とは、観察実習や授業サポートなど様々な学生の体験の機会を与えてもらっており繋がりは深い。この講義では、学校の危機管理についての校長講話をお願いした。

## (3) 展開の概要

授業の展開は原則として1テーマを3～4コマに振り分け、全体での学修、個人、グループによる活動、全体での発表という流れで進めた。グループの編成はテーマによってメンバーを入れ替えることも行った。テーマによっては事前に課題を示し予習を課し、集団討論などの活性化に努めた。また、毎回終了後はレポートの提出を求め、授業の振り返りを行った。

### ◆第1回 オリエンテーション

「教職実践演習」の意義と到達目標について

### ◆第2回 教職の基礎1

履修カルテを参考に目標の到達度をチェックしワークシートに記入する。なお、ワークシートは教職実践演習（仮称）について（文部科学省）の到達目標及び目標到達の確認指標例をもとに作成した。

### ◆第3回 教職の基礎2

講話「求められている教師像」 熊本市教育委員会教育審議員 竹下恒範氏

熊本市の教職員像をもとに、教師に求められる資質能力について問題を提起してもらった。

### ◆第4回 教職の基礎3

グループ討議・プレゼンテーション

前週の講話を受けて、教師として必要なことは何か、卒業までに取り組むことについて、グ

ループ討議の後代表が発表した。

◆第5回 保護者教師の信頼関係づくり 1

講話「学校の危機管理」 大津町立大津小学校長 吉良智恵美氏

最近の学校トラブルの事例を通して、危機を招く要因を分析し、様々なリスクに対処できる教師の力等について課題を提起してもらった。

◆第6回 保護者教師の信頼関係づくり 2

グループ討議「教育現場に潜む危機＝事件、事故後保護者にどう向き合うか＝」

先週の講話をもとに、保護者や他の教師との信頼関係を失うような具体的な事例を調査したことをもとにグループで話し合う。

◆第7回 保護者教師の信頼関係づくり 3

先週のグループ討議の結果を代表者が発表し、保護者や他の教師との信頼関係を築くために、学校事故の予防、防止、対処等を含めて、教師としてどのようなことに気をつけなければならないか、各自考えをまとめる。

◆第8・9回 学級経営と生徒理解 1

実地視察「近隣校訪問と講話」

・小学校：菊陽町立菊陽西小学校

講話「菊陽西小の取り組み」 教頭 松本正伸氏

授業参観の後、教頭講話及び質疑応答

・中・高英語、高校公民：ルーテル学院中・高等学校

講話「ルーテル中・高の取り組み」 高校主事 衛藤繁氏

中高の英語授業、高校公民の授業参観の後講話及び質疑応答

◆第10回 学級経営と生徒理解 2

ロールプレーイング「クラス担任、生徒、保護者の対場になって」

与えられたテーマについて、各班の代表がそれぞれの立場から演じながら課題解決を試み、その後全体で意見を出し合う。

テーマ1 「学年最初のホームルーム（学級会）」

担任の自己紹介、クラス目標、1年間の取り組み、席決め、学級独自の行事等々様々なアイデアを提示しクラスのまとまりややる気を喚起する。

クラスの学年、人数、男女の割合などは自由に設定する。

テーマ2 「運動会前のホームルーム（学級会）」

当日の成功はもちろん、練習過程でどう成長させるか、練習開始日から当日までのクラスの雰囲気はどう盛り上げていくか。

クラスの学年、人数、男女の割合などは自由に設定する。

テーマ3 「夏休み前の保護者会」

夏休みを前にして、夏休みの過ごし方を注意した後に、保護者の様々な質問や要求に答える。

クラスの学年、人数、男女の割合などは自由に設定する。

◆第11回 学級経営と生徒理解 3

グループ討議「学級担任の在り方を考える＝目指すクラス像」

担任としてどんなクラス経営を目指すかグループ討議の後各班の代表が発表する。

## ◆第12回 教科指導と生徒理解 1

グループ討議「教育実習で発見した課題」

各自の教育実習報告書をもとに、教科指導における課題、指導案の書き方について話し合う。各グループの発表を通して、魅力的な授業を展開するために、校種を超えて取り入れられるところを整理する。

## ◆第13回 教科指導と生徒理解 2

グループ討議「生徒指導について考える＝生徒指導って何？」

校種を超えた班編成をして、生徒指導ができる教師の力量についてグループで考える。

## ◆第14回 教科指導と生徒理解 3

履修カルテをもとに、自身の生徒指導力について考える。到達目標を確認しワークシートに記入する。第2回時に記入したワークシートと比較し自身の成長を確認する。

## ◆第15回 まとめ

全員発表、ワークシートをもとに、自身の教師としての在り方について発表する。

## 〔教職実践演習で活用した参考資料〕

教職実践演習の展開には、テーマに応じて新聞記事のスクラップや文部科学省ホームページからダウンロードした各種資料等の他に、下記の国立教育政策研究所資料のダウンロード版を活用した<sup>2</sup>。

- ・ 国立教育政策研究所 生徒指導リーフLeaf. 1 『生徒指導って、何？』
- ・ 同 生徒指導リーフLeaf. 2 『「絆づくり」と「居場所づくり」』
- ・ 同 『いじめについて、正しく知り、正しく考え、正しく行動する』
- ・ 同 中学校の初任者教員「これだけは押さえよう！～生徒指導 はじめの一步～」
- ・ 同 小学校の初任者教員「これだけは押さえよう！～生徒指導 はじめの一步～」

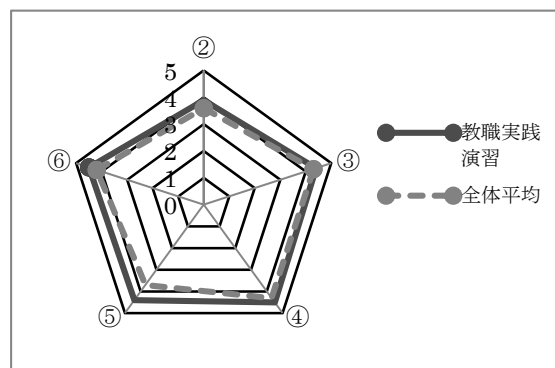
### 3. アンケートの結果と成果

#### (1) 学生の授業評価アンケートから

「教職実践演習」について、学生の授業評価アンケート項目別に5段階で評価した結果を見ると、いずれの項目においても授業に意欲的に参加していたことが、学年全体の平均と比較しても分かる。なお、質問①の出席状況については省略した。

② 講義概要等で示された授業の内容を事前に把握していた3.9 (全体平均3.6)

③ 私語やメールのやり取りはなかった4.4 (同4.3)



- ③ 授業を集中して聞いた4.5 (同4.3)
- ④ 授業時間外に自主的な学習 (予習・復習・課題) を行った4.4 (同3.7)
- ⑥ 授業の内容をおおよそ理解した4.5 (同4.2)

## (2) 終了時のアンケートから

講義の終了時に、講座を振り返って、教職実践演習を学生がどのように受け止めたか、簡単なアンケートと、これからの教師としての在りようについての感想を求めた。

### 質問1 到達目標は達成できたか

回答は、単にできたと書いたものも多かった。各達成目標について様々な回答があったが、おおむね目標達成については満足していると判断できる。以下感想の一部である。

- ・『①については、実習や講座を通して、使命感や責任感を意識し行動することが多くなった。②については組織の一員として、自分の言動が、周囲にどう映っているかを意識することが現段階では難しい。③、④については、児童一人ひとりに愛情を持って関わることができるが、学級経営、教科指導力は不十分だと思う。』
- ・『教師になるものとしての自覚や責任は、この半年の講義で高まったのではないかと思います。学生同士や先生方との意見交換を通して、教師として求められる知識や技能を考え、意識を高めることができました。』
- ・『①と②は身に付けることができた。③と④は、現場に出てみないとわからないものがあるけれども、話し合いを通して見えてきた。』

### 質問2 印象に残ったテーマは何か

多くの学生 (21名中10名) が、印象に残ったテーマとして“危機管理”を挙げた。このテーマについては、現職の校長先生に最近の具体的な事例を通して講話をいただいたことにより、より強く印象づけられたこともあると思われるが、すぐに直面し、自ら解決しなければならない課題としての興味・関心の強さが伺える。その他印象に残ったテーマは、児童生徒理解 (4人)、信頼関係づくり (3人) などと続いている。以下感想の一部である。

- ・危機管理について、問題は必ず起きるものとして対処し、その負担を最小限にするために、教職員全体の共通理解、共通行動をとることがとても大切だと思いました。
- ・私は、ヒヤリハットを見逃さないようにしていきたいと思いました。大きな事の前には小さなことが、いくつか起こっているということをしっかりと頭に入れておきたい。
- ・ロールプレイング、意見交換など自分の中になかった考えや気づきがたくさんあった。

### 質問3 この授業を通して何を学んだか

この質問に対しては、各テーマについてそれぞれ強く印象付けられていることがわかる。教師としての資質を見直し、学校現場における危機管理、グループ討議を通したコミュニケーションの取り方など、教職をトータルにとらえ自分自身を振り返っていることがわかる。『教師として大切なこと、人間性やコミュニケーション能力など教師のありようを学んだ。この授業を通して、自分について振り返ることができた。教師の魅力 (やりがいや、喜び、楽しさ、厳しさなど) を知った。子どもとのかかわり方や、様々な問題の対処法を学んだ。教師に限らず、社会人として考えることができた。』などの感想がそのことを表している。以下感想の一部である。

- ・『この講義を受けて、私が抱く理想の教師像が変わりました。今まで、“子どもを教育し支援するという使命感”と“変化し続ける社会や教育現場において自らも学び成長し続ける向上

心”であると考え大切にしてきました。半年間の講義を受講しその2つが大切であると気づくと同時に、新しく大切にしようと思うことが増えました。それは“人間的な魅力と責任感”です。』

- ・『この講義を通して新たにいくつかのことを学びました。児童の見本となるようあいさつやマナー、コミュニケーションの方法をサボらず丁寧にやること。2つ目は「ヒヤリハット運動」の励行です。クラスや学校内で何かかわかまりが生じたら、すぐに問題提起し、クラスや学校で対処する必要があります。そして、一人で行わず、先生方、保護者、地域の方々と協力して進めたいと思います。』
- ・『半年間いろいろなテーマについて意見交換して、自分自身の考えの小ささに気付いた。また、答えは一つだけでなくいくつもあると気づかされた。同じ教員として考えを共有し、報告・連絡・相談をしていくことの大切さを学んだ。この講義で学んだことが教員生活で行動する際に、心に少しは余裕を与えてくれるのではないかと思った。』
- ・『この講座を通して、2つのことを学ぶことができました。学校の危機管理と保護者・児童と教員の信頼関係づくりです。グループ討議を通して、先生っていいな、魅力的だな、大変だな、気を付けたいなと思うことが多くありました。自分の考えを述べ、比較し、相手の意見を聞く中で、新しい考えに触れることもとても重要な時間となりました。』
- ・『皆で話し合ったり、ロールプレイングをして意見を交わしたりすることで、教師の立場になって具体的に考えることができた。学生ではなく社会人として、一人の人間としての生き方を考えた。』
- ・危機管理、信頼関係づくり、学級経営、生徒指導の意義、理想の学級とは、そのために自分はどんな教師を目指すか、など、たくさんのことを学びました、自分の課題も見えてきました。
- ・観察実習や教育実習などの現場体験を重ねたうえで、教師の在り方、危機管理、学級経営、についての講話を聴きさらに授業を参観し現場での話を聞くことにより、教育現場に近づいた。

### (3) 追跡調査によるアンケートから

県内の小学校や特別支援学校で教諭や講師として勤務している8名の卒業生に、「教職実践演習」の学修について現在どのように感じているか感想を尋ねた。5名から回答があった。

一部抜粋して教職実践演習の成果を考えたい。

質問1 「教職実践演習」の講義の中で心に残っているもの

- ・危機管理に関する講話：学校長から直接学校の経営方針や、先生方の具体的な取組みの様子を聞き、自分のやりたいことが具体的にになって見えてきた。
- ・ロールプレイ：4月の新学期に向けて「学級開き」を行った、先生方や友人の感想や意見がとても役に立った。
- ・グループ討議：普段から自分の思うことを整理しておかないと意見が言えなかった。

質問2 授業の目標は達成できたか

- ・グループでの意見交換や、外部講師の講話、実習の反省を通して自分を見つめなおし、自分に身につけていること、不足していることを整理することができた。
- ・実際に現場に出てから、この目標の意味を理解できました。社会に出ていく前に、この目標

を達成できたら、素晴らしいと思います。私は学生の時点では達成できていなかった。

質問3 講義を受講してよかったと思うことや役に立ったこと

- ・疑問は質問し、自分で考えて行動するなど行動力や実践力が身についた。
- ・先生方や友達同士で話す中で、自分の理想や目標が少しずつはっきりして理想像が具体的にになった。
- ・模擬授業や実習、話し合いを通して、自分の成果と課題を知った。
- ・悩みや不安、課題を仲間と共有できた。
- ・学校訪問や講話、実習の反省の話から、現場の様子をより知ることができた。
- ・発表・発言する機会が多く、自分を出すことができた。仕事に出て、発言することや自分の考えを伝える機会が多いので、この授業で、慣れておいてよかった。
- ・模擬授業など机上での学修より、準備して考える時間が多かった。その点が特に良かった。

質問4 どんなことが身についたか

- ・危機管理の講話を聞いて「自分が子どもたちを守っていかなくてはいけない。」ということを変更して感じさせられた。そして今職場で、万が一の場合に備えて、普段から様々なことに意識を向けて仕事をするようにしている。
- ・先生方や友達の話しから「～したい」「～やってみたい」と、意欲が高まり向上心が生まれ、教育に対する情熱と積極的な姿勢が身についた。
- ・グループで話し合う際に、相手の意見を聞いて、それを肯定しながら自分の意見を言う能力や教師としての自覚や責任が身についた。

#### (4) 成果（学生は何を学んだか）

報告書や、アンケートから判断できることは、教職実践演習の「教職課程の学修の中で、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて確認する」という目標は達成されていると言える。講話やグループ討議、ロールプレイングなど豊かな講義内容から、他者と問題意識を共有することによりさらに学習意欲や教師としての資質向上への意識を高め合い、教職への意欲の醸成に繋がっている。また、グループ討議の中での発言、グループの意見をまとめたの全体会での発表などの機会が頻繁にあったことにより学生自身の言語力の向上に役立っている。小学校学習指導要領ではすべての教科等の指導に当たって言語環境を整え、児童の言語活動を充実させることとなっている<sup>3</sup>。児童の言語活動を充実させるためには教師自身が言語活動能力を高めておかなければならないが、以下の卒業生の感想にその成果が見られる。『講義の中で、発表したり、自分の考えを述べたりする機会が多くありました。発表は得意ではないですが、話しやすい雰囲気と十分な時間があり、だんだんと自分を出せるようになってきました。仕事が始まり、校内研修や学習会、初任者研修で発言する場が多いと感じます。いつも自分の考えを持ち早めに発言するように心掛けています。大学で身に付いた姿勢がつながっていると感じます。』自分が身に付けていること、不足していることを整理したうえで、新任として赴任し、学校でのあらゆる機会でのそのことを自覚したうえで行動している。

半年間の「教職実践演習」の学修は従来の授業に比べて学生の活動、特に討論や、実地視察などの活動から主体性を持って授業に参加していることが分かる。到達目標と比較して自分に足りないものは何かを発見し解決へと取り組んだことは学生自身の課題解決能力を高めることになった。



これまでに学修して身に付けた教師として必要な資質能力が断片的であったものを、教職実践演習の学修を通して統合され、教師としての使命感や、学校という組織における自己の役割、児童生徒・保護者、あるいは地域との連携・協力の大切さ、危機管理への姿勢など知的な面では、十分理解し整理できていると思われるが、実践に結びついているかというところでの不安は払拭されていない。

## 4. 課題

### (1) 具体的な事項に対する活動時間の確保

一人前の教師としての力を身に付けたかを確認し、不足している部分を補いより十分な力量を身に付けるためには、具体的な事象について多くのシミュレーションやロールプレイングを行うことが必要と思われるが、2単位の授業展開の中では十分な時間の確保ができなかった。

### (2) 教育実習との関連

本学では教育実習を4年次に実施している。小学校と中・高英語の免許を希望する者については、小学校実習を5～6月に、英語の教育実習を9～10月にそれぞれ3週間実施することになっている。また特別支援学校での教育実習は4年後期に組み込まれている。2013年度は幼稚園免許取得者と併せて41名の学生が特別支援学校の実習を希望したため、9～11月にかけて、県下の特別支援学校で、五月雨式に教育実習を受け入れてもらった。中・高の英語、特別支援学校の教育実習のために、教職実践演習の出席が虫食い状態になり、12月まで全員が揃うことがなかった。欠席の分については資料を配布し、出席者と同等のレポートを課して補ったものの、全員の出席が困難な中での展開に苦慮した。このことについては、2014年度入学生からはカリキュラムの改正が行われており、いくらかは改善されることになる。

### (3) 履修カルテの活用

2013年度から履修カルテについては紙カルテから電子カルテに変更した。学生のカルテの利用は、セキュリティの関係から情報処理室からだけとなっており、2013年度は教職実践演習の時間に情報関係の授業があつて、3か所ある情報処理室が使えなかった。そのために、授業時間内に履修状況などの確認等ができなかった。次年度は、時間割の調整をして利用できるようになっている。初年度としてはカルテの活用と情報処理室の関係まで把握できなかった。

### (4) 進路

2013年度教職課程履修者の最終進路は表2のとおりである。教職を希望する学生の進路は100%達成することができた。免許取得者21人のうち9名が教職を希望した。一般企業への就職者が5名おり、免許取得者に対する教職就職者の割合は42.9%と50%に満たなかったことは課題として残る。

表 2 2013年度卒業生の進路

免許 取得者数	教職希望者数 ( ) は%		大学院等進学者数 ( ) は%		保育園等希望者数 ( ) は%		一般企業希望者数 ( ) は%	
21人	9人 (42.9)		4人 (19)		3人 (14.3)		5人 (23.8)	
	決定	未定	決定	未定	決定	未定	決定	未定
	9人 (100)	0人 (0)	4人 (100)	0人 (0)	3人 (100)	0人 (0)	5人 (100)	0人 (0)
	本採用	臨採						
	2人 (22.2)	7人 (77.8)						

## 5. おわりに

本学では小学校教員を目指す学生に対して、1年次生に科目外の科目として「教師力演習」を開講し履修を義務付け、教職科目の履修前指導を行っている。学校の第一線で活躍中の先輩教師や管理職の講話を取り入れ、教師の魅力ややりがいについて語ってもらい、教師としての心構えや使命感を高め、2年次以降の専門科目や教職の科目の学修をはじめ、密度の高い学生生活を送ることができるように働きかけている<sup>4</sup>。

また、2年次3年次では夏休みを利用して出身小学校にお願いして観察実習を実施している<sup>5</sup>。これらの取り組みを通して、教師としての使命感や責任感、教育的愛情に関する意識を高めて教育実習に臨ませている。今回の教職実践演習では学生が自らの履修を振り返り、教師として教壇に立つにあたっての使命感や、責任感あるいは、何が課題であるかを自覚することはできた、しかし実践に即した技能についてはかなり不安を持っているようである。教職実践演習に加えて実践的な体験を重ねることにより目標の到達が可能になると思われる。本学では、2014年度入学生から、3年後期～4年前期に「児童教育フィールドワーク」の展開を予定している。これは、インターンシップをイメージした科目であり、教育実習と並行して学修し教職実践演習に続ける。児童教育フィールドワークと教育実習による継続的な実践体験が、初年度の教職実践演習の課題解決に結びつき、教職教育のより一層の充実につながることを期待される。

## 注

1 教職実践演習（仮称）について：文部科学省

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm)

2 国立教育政策研究所

<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/>

3 小学校学習指導要領 総則 第4 2の(1)

「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育

成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」

- 4 益田亮英「教職科目履修前指導の試み ―「教師力演習」を事例として―」『九州ルーテル学院大学V I S I O』第41号、2011年、pp. 9-20
- 5 益田亮英「小学校現場体験“児童教育演習”の成果と課題」『九州ルーテル学院大学V I S I O』第43号、2013年、pp. 33-43